

Craib, List of Siam Pl. 391 (1911); Contrib. Fl. Siam, 105 (1912).

Distr. Indo-China.

**Rothmannia longiflora** Salisb.

Distr. Native of Africa, cult. in Trop. E. Asia.

\* \* \* \*

ミサオノキ属は *Randia* L. が使われている。この基準種は 北アメリカ南部にある *R. mitis* L. であり、これに外観上近いアジアの種類は *R. spinosa* (Thunb.) Blume である。しかし前者は四分粒花粉をもつて、後者は单粒花粉であり、その他花冠内面の毛のはえかた、胎座の構造、果実の構造などに違いがある。Keay (1958) は別属とすべきことを主張し、さらにアフリカの *Randia* と *Gardenia* とを検討して、多くの属に分類しなおしている。ヒマラヤの植物を整理するにさいし、*Randia* 属植物を検討することが必要となった。アジアの植物は資料が不足しているが、現在調べられるかぎりでは 5 属を区別することができる。3 属はアフリカと共通の *Aidia*, *Xeromphis*, *Rothmannia* であり、一つは東南アジア特産の *Oxyceros* である。又ヒマラヤの一一種は他といちじるしく異なるので新属とする必要がある。今までの広義の *Randia* が大きすぎて異質的な種類が多く入っていたのにたいし、Keay の分類では属は純粹にはなるが、小さすぎるようと思われる所以で、もう一度検討しなおさねばならないであろう。しかし世界的な規模で *Randia* を検討することは不可能なので、一応 Keay の分類に従っておく。

日本で関係のある種類は ミサオノキ (*Aidia cochinchinensis*), シマミサオノキ (*Aidia canthioides*), ヒジハリノキ (*Oxyceros sinensis*), ハリザクロ (*Xeromphis spinosa*) である。

(東京大学理学部植物学教室)

○小笠原島に野生化したサンショウモドキ (新和名) (津山尚) Takasi TU-YAMA: *Schinus terebinthifolius* Raddi is naturalizing on the Bonin Islands.

1968 年 12 月 5 日小笠原島父島の奥村から乳頭山の方に登るジープの道を登って行った所、二、三個所に、自然群落の中に、見馴れない植物を見た。葉は 3-7 個位の暗緑色の小葉を有し、光沢があつて硬く、枝は広い角度に拡がり、トゲはないが一見サンショウの親玉のように見える小樹である。枝の先には直径 3 mm ばかりの果実が数多く集まり、色は鮮赤色であるが、未だ若いものは白色、淡紅色などで、これが混りあって美しい。すぐ輸入物だと感じたが、村落の中にはなく、その後小笠原島のどこでも見なかった。花の標本がないので、調べもせずそのままにしておいた所 1969 年 8 月ハワイのオアフ島に行って見て驚いた。山手の家の庭には軒先にいたるまで、この樹が數 m の樹冠を作っている。また、今は荒れはてたオアフ島の原野、山足にギンゴウカン (熱帯アメリカ原産), *Prosopis pallida* var. *limensis* (北部ペルー原産,



*Schinus terebinthifolius*, Okumura, Chichijima (×ca. 1)

マメ科）などと共に相当な森林あるいは独立木を作っている。ハワイでは Christmas-berry tree, 島名は Wilelaiki, Nani-o-hilo で、ウルシ科の *Schinus terebinthifolius* Raddi であることが判った。ブラジル原産、家の庭などでは案外観賞用に喜ばれてい るらしい。これが、乾いた土地に拡がり始めると自然植生を破壊することはハワイにおけると同様で、これが高く繁茂すると枝葉がうとましく乱れ、決して美しくはない。12 月頃の美しい果実の色香に迷わされて、ほっておくと、小笠原島の自然植生に対し 大きい被害を与えることになる。果実を鳥が運ぶから、今の中に駆除してしまい、悔を後世に残さぬようにしてほしい。

（お茶の水女子大学生物学教室）

□千原光雄： 海藻・海浜植物 標準原色図鑑全集 15. 256p. 63pl. 19×12 cm 1,200 円、1970、保育社。緑藻植物 53 種、褐藻植物 76 種、紅藻植物 213 種を主体とし、海産種子植物 5 種、海浜植物 30 種を従とした図鑑である。撮影にはより新らしい海藻標本を用い、生育状態の写真も加えられているので、色彩が自然であり、製版技術の進歩により、従来の図鑑にくらべて、仕上りが原色に近くなっている。属や種の解説は適切で、らん外には部分図、解剖図、分布図などを多く挿入し、理解を深めるよう配慮してある。一般、学生、専門外の植物研究者にも参考書として恰好なものと思う。

（佐竹義輔）